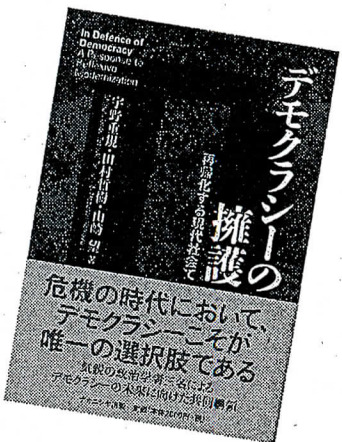


# 希望のデモクラシー？ 或いは「話せばわかる」のイデオロギー

「デモクラシーを擁護すること」が他者を抑圧する言説となる可能性には敏感でありねばならない  
大賀哲



宇野重規・田村哲樹・山崎望著  
再編化する現代社会で  
▼デモクラシーの擁護  
12・必刊 四六判 三〇六頁 本体 二八〇〇円  
ナカニヤ出版

かつて、「神聖だが浮気者」  
という辛辣な表現で「デモクラシー」を形容したのは政治哲学者ハワード・クリックであった。確かにそれは「神聖」な存在である——デモクラシーを真っ向から否定する政治イデオロギーはもはやこの世界には存在しない。他方で、それは「浮気者」である。デモクラシーは自由主義、共和主義、社会主義は勿論のこと、独裁政治や権威主義体制など一見相反する政治概念とも容易に結びつく節操のない存在であった。デモクラシーはそれ故に、「自由」と「民主主義」を振りかざし、愛妻家のふりをして帝国主義という愛人を囲っているようなアメリカの新保守主義ともうまくやっていた。昨今のデモクラシー論の動向はこうしたシレン

マを体現している。議論の焦点は、デモクラシーを如何に「民主化するのか」という逆説的な問いであった。本書もまたこうした逆説への能動的な回答を試みている。すなわち、「絶望的なほど、否定的に語られる」デモクラシーを擁護することが本書の企図である。

しかし、デモクラシーを「なにか」から擁護するのであるのか。著者たちの回答は「再帰的近代化」である。本書は共同執筆の「共同綱領」と個別論考としての各章から構成されているが、「共同綱領」では再帰的近代化にかなりの紙幅が割かれている。再帰的近代化とは、時間と空間の分離と再結合、流通可能な相互交換媒体を通じた脱埋め込み化、再帰的秩序化（社会的なこの「共同綱領」を受けて各章の議論が展開されていく。第一章は、主権／生権力／承認という三つの位相から政治的共同体の変容を論じ、人々を国民国家へと再包摂する言説（リベラル・ナショナルイズム）、政治共同体へと再包摂する言説（熱議民主主義論）、境界線そのものを開放し、世界大の政体へと再包摂する言説（絶対的民主主義論）の三者を対比しながら、他者との対話の必要性を提起している。第三章はデモクラシーのための環境設計、とくに複数の選択肢が存在しつづいても特定の選択肢が選択され易い環境を設定することを強調している。その上で、熱議を押しつけることは必ずしも特定のデモクラシーのあり方を押しつけることではない、すなわち「正当なパターナリズム」とデモクラシーは両立し得ると主張している。また第四章は、フランス政治哲学の立場からデモクラシー論を再考し、個人主義への両義的態度に着眼し、個人の自律／社会の自律が必ずしも二者択一ではないと論じている。

個別の議論としては相当に示唆的であり、現代デモクラシーを検討する上で重要な論点が網羅されている。しかし、「共同綱領」との連関で、それぞれの議論を俯瞰するならば、やや消化不良の感が否めない。その他多々のデモクラシー論がそうであるように、本書における「デモクラシー」とは前提として結論であ

る。第二章は、主権／生権力／承認という三つの位相から政治的共同体の変容を論じ、人々を国民国家へと再包摂する言説（リベラル・ナショナルイズム）、政治共同体へと再包摂する言説（熱議民主主義論）、境界線そのものを開放し、世界大の政体へと再包摂する言説（絶対的民主主義論）の三者を対比しながら、他者との対話の必要性を提起している。第三章はデモクラシーのための環境設計、とくに複数の選択肢が存在しつづいても特定の選択肢が選択され易い環境を設定することを強調している。その上で、熱議を押しつけることは必ずしも特定のデモクラシーのあり方を押しつけることではない、すなわち「正当なパターナリズム」とデモクラシーは両立し得ると主張している。また第四章は、フランス政治哲学の立場からデモクラシー論を再考し、個人主義への両義的態度に着眼し、個人の自律／社会の自律が必ずしも二者択一ではないと論じている。

個別の議論としては相当に示唆的であり、現代デモクラシーを検討する上で重要な論点が網羅されている。しかし、「共同綱領」との連関で、それぞれの議論を俯瞰するならば、やや消化不良の感が否めない。その他多々のデモクラシー論がそうであるように、本書における「デモクラシー」とは前提として結論であ

九州大学准教授